

聖廟法樂千句注
明應三年二月十日
兼載独吟

伊地知文庫
文庫20
100



子句獨吟

伊地知氏書冊

何路第一

續吟卷六

急載

伊地知氏

梅の香ふうねもあやめ 朝霞 色は秋

妻乃より國はわづら 梅の花もささね

もかたさしゝささねわすし 益しんかきしは

か 色にさみねき 宿ねの夜しきもいそし 益

やとま顔のんをさして けり前と益とささ

五月ゆるさきとら 宿のうし 宿のさしとま

にまふゆかたさ 宿のさしとま 宿のさしとま

のさしとま 宿のさしとま 宿のさしとま

るさしとま 宿のさしとま 宿のさしとま

八海はさしとま 宿のさしとま 宿のさしとま

葦の葉ももたれぬ

ちりやうりあつたてのうらみ

春のぬくまのほころび

けしきもまた夏の日の月

とよみよの月と行つた侍

いそよ夏の日ぞあつた

る胸舟もあつた神の御

い母のませ川もあつた

いそよ

風うらちいよりの水

まらあきのしつら

あつたすつた

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

いそよ

一、...の...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

言へば...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

まゝ山の裾とて越へ月影 月も昔天は妙く秋

少なり多のそと音跡鳴と云り

式花妙く何秋をそのとてうらん 山の裾のとて秋を

式花のとておひいせえ

いさし花をゆきを秋はなそとて 山から凡のすまよ

吹く来一ふゆ秋合あり

子草花露を消も定あり 子粒のおは消く

徳ととも秋の秋凡のそとてうらん

昔よりむらりゆりもつれ物証 人とは世よりむらり

一人も消ゆらる時ありよ子草花おは消く又結とて

つみよ山又とてすよ秋く来 白髪よより事八花のみ

れお花も昔く秋とてうらん

沈みのさむらふらるる多しとて 沈の鏡とて舞ゆり

沈水の音なりすよいさしとてうれちるも花を結ん

るよ鳴りんとて

羨ららるる人おひいせえ 昔 秋をみ目覚

くよとて 雲のとてうらん

悲涙ももなりとて 雲跡のうらせん 悲しなな世の

水雲よゆらとて 昔とて 昔打さるる悲像りちる

ちるる涙也

しるるはらるる人のそとて 秋人の面影悲の昔人か

何あれい 再世の昔人とも 昔よい

春風とて 秋跡よ 友らひと 友も 秋よ ゆり

なる 春風とて 人の面影よ 昔

花を枯らさるるを此疾 田舎の庭花もまは
かり神りたる心也 花の星があること
多は花を枯らさるるをいふこと

ゆふ雲 雀の庭に花をいふこと 雀の庭に花をいふこと
とけく言ふ春の神也

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと
花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

引琴をいふこと 初まると 花をいふこと
花をいふこと 初まると 花をいふこと

心也

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

たえ 風賦比真 雅頌の儀と云り 初

の花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

花をいふこと 花をいふこと 花をいふこと

日暮其の忠と愛あるにふよ 日暮の初秋の物
あはれ也

小春みくもくたのつら 月夜 人のあはれを
あはれ 秋の夜はあつたの 日暮しの物

今暮れ 秋の夜はあつたの 日暮しの物
こや 月夜 秋の夜はあつたの 日暮しの物

行人とつら 秋の夜はあつたの 日暮しの物
壽のあつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

の命とつら 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物
あつたの物とあつたの 秋の夜はあつたの 日暮しの物

うき世に於てはあはれと物言ひしは
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす

あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす

あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす

あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす

あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす
あはれと世をさるるもいとあはれす

あはれなる御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

あはれなる御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

御心にて御心にて御心にて

毛海人と也

カミヤノミヤノ一巻の巻にハシメテシテハモトノ海人トシテ

麻とモトノ巻と也一巻ハハシメテハモトノ海人トシテ

事ト結ナリ也

あつちりと思はるは老成無くもいふそいふは

夢のつらさの枕屋のあはれに更なるは

枕の寝の巻をハシメテハモトノ海人トシテ

海人の巻をハシメテハモトノ海人トシテ

と云ふは巻をハシメテハモトノ海人トシテ

今いふは巻をハシメテハモトノ海人トシテ

はらりたる巻をハシメテハモトノ海人トシテ

巻をハシメテハモトノ海人トシテ

巻をハシメテハモトノ海人トシテ

巻をハシメテハモトノ海人トシテ

巻をハシメテハモトノ海人トシテ

巻をハシメテハモトノ海人トシテ

賊何木連歌

卷二

浦ぬら、今も、巻をハシメテハモトノ海人トシテ

あつちりと思はるは老成無くもいふそいふは

たつた

一板もゆるぎなく書きし
ついでに家へまゝに梅の一本をよみおこし
後しよと何れいふとまづりて結ん
まゝ一板もゆるぎなく書きし

形もゆるぎなく書きし人の口におはればな
いふところよ書きし情もいふ文も書
きし今もいふよ書きし我もいふ
まゝ一板もゆるぎなく書きし

灯りもゆるぎなく書きし
なれぬおはらぬと書きし
面影もゆるぎなく書きし
まゝ一板もゆるぎなく書きし

おありしおはらぬと書きし
ついでに家へまゝに梅の一本をよみおこし
後しよと何れいふとまづりて結ん

まゝ一板もゆるぎなく書きし
ついでに家へまゝに梅の一本をよみおこし
後しよと何れいふとまづりて結ん

おありしおはらぬと書きし
ついでに家へまゝに梅の一本をよみおこし
後しよと何れいふとまづりて結ん

よりの綴よぬく白髪しつゝをみよ
むし^{ニウ}しつゝをみよくあまぬらんや
梅の香りはれぬや

しよ守文とくひてそみる 紙こころし
あまもや 紙真とちきり ちりぬ紙の香
ららねく昔のこととてかたじけなくも
梅の香はれぬあけに衣てよ 七月ちる梅は
ちり用紙の香もやそししちりちり入る也
あまもや又ちりあまもやそししとてすれぬ
也

あまもや 紙真とちきり ちりぬ紙の香
ららねく昔のこととてかたじけなくも
梅の香はれぬあけに衣てよ 七月ちる梅は
ちり用紙の香もやそししちりちり入る也
あまもや又ちりあまもやそししとてすれぬ
也

重川のすくひら書よ月あく 是と初秋のさ
まらぬ也

さひま飛くの子の屋まれと 文の終よ月あ
くよまをせしりるさぬ也

草のつらまらちや竹と泳じらん 草の香の
花を飛やうあけく竹もく泳わぬぬ也
甚成紙友のこころもはな 向まん初秋まを
あまもや 待ぬるは縁あはちりる也

ゆりもよらや物まら 昔れ下 ちりな
らん香の下とてこころなま 花の香はれぬ
とと女と物まら 也

ちりもよらや物まら 昔れ下 ちりな
らん香の下とてこころなま 花の香はれぬ
とと女と物まら 也

約いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて
一葉のいひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて
まゝに一葉のいひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて

のりあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて
同古人のまゝにのりあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて

月白くうれ馬の鳴き声よ うれ馬の鳴き声
初月一葉のいひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとて

昔のいひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとて
鳥のうれ馬の鳴き声よ うれ馬の鳴き声

右てはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて
いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

いひあつたはなはなとてはなはなとてはなはなとてはなはなとて

わが心は人百縁の小蝶よめく夢をば
かりなる心はをよるゆり

あそび世よのまはるるをこころひくそいばよ
世の情やふらふのふらふ

うそてふ世とおてぬの世とねらるは
△とぬる者もあはれ世のあはれ

我言とらうひとてはるやあそび
を欲あそびよあそびいばあそび

さういふつらういばあそび

仇人ともあはれはる人の

ゆ緒とる者もはるおたのまはる

あそびはるいばあそびあそびあそび

あそびとあそび人の世のこころあはる人あはる

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはる

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはる

あそびはるあそびあそびあそびあそび

あそびはるあそびあそびあそびあそび

何處を尋ねるもあはれゆりて燈の影を掃く
あま庭の月影の西を掃く 月影を掃くといふ
約をなす海をわきまぬといふけり
秋の初めもあはれゆりて 海人の月影を
裏と見よゆりて 詠らば月とてあ
そひしあはれすといふ也

用一つさし 詠のりりり 詠らうと用一
あはれ無寝といふはちりり也
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
してあはれゆりて 詠らうと用一
あはれあはれ也

あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一

あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一

あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一
あはれあはれと詠のきりりり 詠らうと用一

その是行の海子の事 海子の事

昔の朝の花也

昔の事あると云ふ事 其の行かぬ事

よき人の事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

よき事と云ふ事 其の事

みまをあらわすもよもやあらはれぬ
海をのりて書きてししよふいさよふ
と月を物ぞぬくたぢちまも心くも
生ひよも書きてぬくたぢちまも心くも
月とを名ももくぬくたぢちまも心くも
袖よりすめすもくぬくたぢちまも心くも
海乃心波くくつり書秋の情
わらなももぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも
ぬくたぢちまも心くも

ぬくたぢちまも

くくぬくたぢちまも心くも
又もぬくたぢちまも心くも
様のくくぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも
毎あつたぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも
白波の風たり神はぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも
くくぬくたぢちまも心くも

ぬくたぢちまも

賊山何連秋才三

ぬるきの志よりとそつ柳哉 け鳥く急なり
ゆめなきの志よりととあしく強りきなり
ときなときき反ととゆりななき柳のゆり相
あれいきなり柳よ思ひをせきなり反そあれとと下
ゆめよすし思世人の望 望よの鶴を柳を約
まじいこと柳とさり 葉の氣のち也
小田五ととをくく人よあれく 面の埃ちの心
田うしうり柳葉氣をけさく面白ゆり
いふふれ中い別才三思ふなりしうたや
ちり

みゆさえくよ水落るる音 ぬらみ跡の水也
昔やれ葉ぬもあつく如ねん 若尾の葉原
多利りの水くさえくまうまうなる程也
袖いころる葉の葉なり 夏葉の袖を二葉を
おー 昔らなまを射く付ゆり
さふ葉何よも思ひん 若尾の衣 葉と袖よ
つしつこいまゝ けあきもかまぬ物
夏けの所よりあまねるさの女なり
おろくくく月と待らう 月とおろく
あまはまままもれなま心也
秋の母よ結ひをせぬも花 月と雲の母
たもまは花と結ひをせぬも心也 秋の母

あはれなる御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心

あはれなる御心 御心 御心

あはれなる御心 御心 御心

わあまきつひのこころをたたくらうかきかへり
——一人の花あや

書いのまらあやもりしつみり

月歌とあやあやもりもん 輝ををりも

一乃の海をて 物出とあや ちう海をなほ

こしこし 人をもんちうと目成りし

つらねと後れも海のま

今よりきつひのま 依 母のたへん

あやまんとあやまんと秋のん

しんも病もあやまの奥 世成りひり

あやま秋の海もあやま

あやまあやまのこころを あやまあやまはあや

そらうーのこころを倍のま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

あやまあやまあやまあやま

七 鶯のこゝろをせしむる秋

竹のこゝろをせしむる秋 鳥の竹のこゝろをせしむる秋

夕みぬ秋や風なりきぬん 秋の初風竹の影

よ打らぬもよなるにや 月秋 秋来ぬと月を

まふふみし秋の音はそやまふこれなり

秋は秋なりと鳴るをきき ばらぬんを鳴る

とせしむる秋

古河の水を月よりあつぬく 月のらるる

河古河はよ水とまらぬや又鳴るは清く

あまなるや

東の川のこゝろをせしむる秋 古河は清く

とせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋 一とせしむる秋

とせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋 是をせしむる秋

鶯のこゝろをせしむる秋 鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋 鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋

鳥のこゝろをせしむる秋 鳥のこゝろをせしむる秋

まじりてせんしなるものさしりしや

かきつゝまはさるにん言川若くはなるまじり

けくさるまじり心なきまじりりらりしもの世もま

たや

誰かのものめし月も光ぬんし 我が心もなま

も踏らに勢いうらまはれ夢とさぬん

知る昔もあぬ流の世中いせの夢と我知

いそりしはぬよれあく光すもんと世さ

やいこまは秋の夕日お命てうしもの物

ゆりてあつと暮るものさるとはまいそ

ぬつこらぬしや

いづる時流まじりしのこと行と約ぬまは

らとゆるんまじりしとちりぬまはまじり

まじり

ちりりしと今も枯せぬぬぬん ぬぬちり

つりりしと枯せぬぬぬんつりりしと

る流約しものさるにや

あつぬぬと今もまじりし ぬぬ人のさる

しつらちや

物のぬら古流恨とつりぬん 物のぬらぬん

ぬんぬのさるのさるぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬ

心すすの波やちるらん ちるらんは振と
すそ結ふらん ちるらんは振と ちるらんは振と
白くも花もさうり 若れ袖 けせの心音と
とくも心音とさうり 若れ袖 けせの心音と
ちるらんも心音とさうり 若れ袖 けせの心音と
のちるらんはちるらんはちるらんはちるらんは
の心音とさうり 若れ袖 けせの心音と

本れ本ままよまらるる 樹下をさすま

三 甘地ぬれ

自ら乃雲より霞のまをぬく ちるらんは振と
ちるらんは振と ちるらんは振と ちるらんは振と

おや

月やさちぬ様叫ぶ 雲霞のちるらん

八月とみよ ちるらんは振と ちるらんは振と

月とさうり ちるらんは振と

はちるらんは振と 秋の風 曉は様をさす

おやちるらん

小藤のまよ ちるらんは振と 小はちるらん

ちるらんは振と ちるらんは振と

ちるらん

救らぬ者ありあつた 様はえ ちるらんは振と

ちるらんは振と ちるらんは振と

ちるらん

ちるらんは振と ちるらんは振と

いさよこころなるれいふの海にぬいては
下のうちをくくはるるあこころをゆり

あこころしきりなるはあこころしきりなる下白

ありとのちをくくはるるあこころしきりなる下白

いさよこころなるれいふの海にぬいては

ありとのちをくくはるるあこころしきりなる下白

いさよこころなるれいふの海にぬいては

海の別乃りたりきりなるや海の別乃りたるを

つらねきりなるれいふの海にぬいては

目つみみなるれいふの海にぬいては

いさよこころなるれいふの海にぬいては

海の別乃りたりきりなるや海の別乃りたるを

つらねきりなるれいふの海にぬいては

目つみみなるれいふの海にぬいては

いさよこころなるれいふの海にぬいては

海の別乃りたりきりなるや海の別乃りたるを

つらねきりなるれいふの海にぬいては

目つみみなるれいふの海にぬいては

いさよこころなるれいふの海にぬいては

海の別乃りたりきりなるや海の別乃りたるを

つらねきりなるれいふの海にぬいては

目つみみなるれいふの海にぬいては

いさよこころなるれいふの海にぬいては

海の別乃りたりきりなるや海の別乃りたるを

つらねきりなるれいふの海にぬいては

雲より袖はきき新設御給り也

雲より袖はきき新設御給り也

とあらはれぬるれはたのこあはれぬるれ

たあらはれぬるれはたのこあはれぬるれ

はたあらはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

三ツ
おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

おはれぬるれはたのこあはれぬるれ

かみりて對してなる一は海に波をたてしる

神のまじりていへばあつちる人火のあつちる人

とまじりて候じ一は海に人

海と反りてまじりて見ん海は海に道

のまじりて海にまじりて神とあつちる

し海はまじりてとあつちるいぢまらんと

とあつちる

いぢまらんとあつちる人海にまじりてあつちる

とあつちるあつちるあつちるあつちる

かみりてなるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

あつちるあつちるあつちるあつちるあつちる

いかにふかき月のおもひのつらさ
もいかにあはれしるまは

秋ももえら後生を乃有 秋は月六

秋のつらき心はしるしるし

又書は秋もかいら思ふを悲しき

きく書と云ふ思ふはつらき

秋の又書は秋の心也

いふ書は秋の心也 秋の心也

つらき書は秋の心也 秋の心也

と云ふ書は秋の心也 秋の心也

いふ書は秋の心也 秋の心也

いふ書は秋の心也 秋の心也

いふ書は秋の心也 秋の心也

いふ書は秋の心也

毎朝厚ぬりしるきよけ ちつたひふきらの
おと影とつたて敷くは死しや

みきま湯のさゆをよきとくさくきひと

うゝぬ花をみてあはれしはなむり

まの影とちりかきしん 美人と花のまの

しと影と敷るしと影とんや ちりま

よ如くあつてあまは影とはいらぬ

衣にまにたるすまのあつてま 衣の衣を

はらまの抗のまの影や

昔のまをし 房をひらして 白雲を帯て影の

のちと影とあまの影と衣のち若女の肩

よと影とあまの影の影や

曹公今白山のちと影とあまの影の影

の影とつてけしとあまの影の影の影

とさつとまの影とあまの影の影の影

山懐の影とあまの影とあまの影の影

と影の影とあまの影とあまの影の影

よゆの影とあまの影とあまの影の影

秋風よかりとの影とあまの影とあまの影

乃若るの影とあまの影とあまの影の影

ちりまの影とあまの影とあまの影の影

るる影とあまの影とあまの影の影

こよまの影とあまの影とあまの影の影

少影とあまの影とあまの影の影

少影とあまの影とあまの影の影

おらうは月をいぬかきおぼしめしあはらるるのちを
あきらむる也

音はすれはあそびの音 古き月のあ

ききしるはれ音のみはあはるはれ也

はくよの糸は竹の打みこれ ちのれおとま

よとくはあそびのちのれのみはるる

あそびはくはるはれ

そのおとよのあそびはあはる ちのれおとま

あそびはくはるはれ也 胡蝶糸珠網とあそ

まはるはくはるはれ也 ちのれおとま

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

あそびはくはるはれ也

賦何人連歌中

月あはらしるはるのちをあそびはる ちのれおとま

あそびはくはるはれ也

白しきしあ
まはるる薄く白く散るる月
光をきしんもまはるる月つぼみ
まきの月をらんらんあつ

雲霞子あつまきのつかり
と国つらうはと松のつらちあ

いしちかたしつあゆる松や
あめーーんひのゆるゆるあ

いぢりけやあこもまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

いぢりああまきのあ
いぢりああまきのあ

よらちせり

かり移る情も秋の萩の月あつらひき月とて
しとて様もや一む清きなるは情は月

とや

松ももしも草の露あつらひ 月の移らへり
草この萩のやちくる情惜れとて

巨の言やとし神のみけん 我の神の氣よあそ
をそそそ言の言とけくちるいなる神のみけん

人乃きよらひもあそぬたつよ

あつらひ花は清き芽生の陰 暮るるたつらひ

まきしをよあそらひは伊簇なる也

すな神とて風の夜はけし梅 上はまは東のあそら

よちりかふとちかちかち花はとけり

すなれしとまきしはまきしと 風の夜はけし

籍よけりし 竹山様もつとあれ清き神

りとしらそ梅はけりるの萩よ 萩の萩ひり

あきつる萩のも余もよまきしは清き

とや神也

あきつる萩のも余もよまきしは清き

のまきしはまきしはまきしは清き

はるれ物なるも心もあそ

何も、萩の萩と神もあそん 萩の萩とあそ

あつらひ萩とての清きもあそ

しとての清きもあそ

人の園と書物に酒とされ 号もといふ意は
くまひくとも也 方あるもよと我々の意の
あるれい何もの鬼のすまぬさうさうと云
心成る一

カキ乃知あり世にらまうと 東の事をあり
世と道と楽としそあこと ち木の心もや
かち記名とよはしひけく之を 馬鹿甲けは
てそありげらるの賢人 賢人言傳く方名也
早敷と折人あきいふは 伯夷叔母といひ
一 賢人兄弟を陽心とてしひを打く
かとうくつる人也 ともとも折人のあき
まて賢人の存るみ成るといふ也

まられあく箱子にふくも 是もまのり
おしおく藤折人あきいふは 箱子のまられ
あきいふ也

うい海井は海にけりといふ ちうのち也
まらあくとまのいふもいふ 水の煙の音記
あきいふ也
離世はちのり新らぬよ 離世音とて
あきいふ也

い十氏にら月うらむ人 人の氏をちる也
かのまは十氏とていふ 世に成るも中は
はらる侍りや佐川は 侍りて早き
河原の月かりるるを 侍り

秋の萩をきくぬき此境をくや治まは寺
を治まは境と云いよわが秋の境をりて
月のならう萩のや

由る此界のまは申しら山路の極神を霧
枯らるる小庵や露をらるるんけり松や露を
霜は結らるるや

海らちの宮に草の戸 露をらるるを御斗
也

胡弓は世に人そ女もなし海をそら女
ふらぬら也

誰は思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ
とら思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ

夢あつて心の一もと夢中よ 我らの夢を
うら思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ

夢を袖をぬきけりひき 夢の内を袖
のぬきをわたりてとみん 夢ゆとらそ

夢を
利に秋燕は枝に棲宿しと 燕は移り

秋を夢はぬきよみとら也
うら思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ

うら思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ
うら思ひをわたりてとみん 夢ゆとらそ

打撃は心りそや 煙は枝のこ
ゆらるる枝をゆらるる枝

嵐の居り集の浦の言はり 三の居りり

海より来る風也

春風 嵐の居り集の浦の言はり 三の居りり

浪をなれり方也

春風 嵐の居り集の浦の言はり 三の居りり

春風 嵐の居り集の浦の言はり 三の居りり

乃海ぬ心也

あつしつひよきはひん 春の末の浪也

ちぬき也

中より来る風は福をく ちえあぬ心

のちよき言まきよぬゆり 春の道なり也

まよき言まきよぬゆり 春の道なり也

一季中此福なり也

浮雲よこり月見あまあ〜 何るも〜

雲と波の心なり也

あまの物にひらある宿 玉あり礼あり

とまの月より下り 月影竹の影あり也

月影竹の影あり也

月影竹の影あり也

あつしつひよきはひん

あつしつひよきはひん 春の末の浪也

唯見ぬ心 秋月白也 待つ心なり也

あつしつひよきはひん 春の末の浪也

あつしつひよきはひん 春の末の浪也

〜

思ひつゝのなるをいそねきれえ
まのぢのいそね
友約しんごのわんごの神と櫻
しつちもわんごの
雪消るんごのまのぢの
まのぢのわんご

字よおろし〜しつち〜しつち
船廻すつち〜しつち
あまの舟のまのぢの
まのぢのわんご

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの
まのぢのわんごのまのぢの

まづつらと母軍のこゝを車と御のどと云
つらつらとくらくらとこれ降るる城に御

家もあまは世路のちかちかきやゆきと御ん
まゝのたふしと世路のちかちかきやゆきと御ん

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

まづつらとあまのこゝに御のどと云
まづつらとあまのこゝに御のどと云

冬に月をみたり
か^ミ敷く唯ぬぬん小長 唯つろ
移ぬんも月を足らぬ也 我神のぬ
かりくちりそゆり

多れ着るの別中あてきぬくの流よ
くまの唯ぬぬ人のちんあ

淡川舟をさも水まてくまを水ま
り別け流と流まの別中あ

あしと水のまも物も別中あ
の福くまをくちりあて
まらぬそゆり

流みのくちりあて
の流みのまもあて

拾ふころのやうなまも
は物も流の流みのくちりあて
ゆらぬあ

るはまも流の流みのくちりあて
くちりあて

そくちりあての目まもくちりあて
は親の目まもくちりあて

ちくちりあての目まもくちりあて
くちりあて

をくちりあての目まもくちりあて
くちりあて

川流のまも水のまもくちりあて
くちりあて

の人どうもわさづかす

歌は多岐又のそらよ月影く 山家たの秋

まほゆや

ひげふふ指の袖志しるる 是とちりのちや

引緒よお同の床や 甚なりし 甚くまをり

らまは秋のふたよ 降つて方なや

ましまるひましく 床れおれまを人とのまをり

うまは床のこおれまをり

是そゆいよまをりし 秋の夜は 是の夢

の床のや 若のしと舟とて床の夢は

若は活せ霜降こみし 書よつて

床と白り人まの 敵さしゆい

夢のともさなり どのもよおゆ

みつはる若時 床のちや

かのうらとてあるまは 夢をあらと見

ゆいひらうらま

なれぬ世やとて 床しとほふてはのり

あつもあるぬまて ぬらけまはるぬ

こころぬや

す忠のら泥り 床もよおん 若りや

しと相や

假譲く人の 跡いら 若きと

みの若きとは ぬまよてはなよ

みんま

何と云ふも花を愛せし心
思へば苦しき何ぞありしや

花を愛するは人の心
の何れもあはれむるや

誰か花を愛するは
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心
花を愛するは人の心

鶯よりをちりりともや 俊成に詠よ
をうれそ氷こみぬみそとく若ものこゝろと
こゝろ

まよひ梅を花のひけみゆ 花梅の舞あつこ
ゆや花もさういふさうもあ

存す忠の風を言のこたけして 妻のうや

星もさういふくもよ言ふこと 源氏も青月を

待つ月のゆえを言ふゆのひり針刺も

とこ又流星は遠くまると云の心也

さふるる陰をくさる初秋よ 雲のこころ

冠もや星は雲ゆふ物あまな

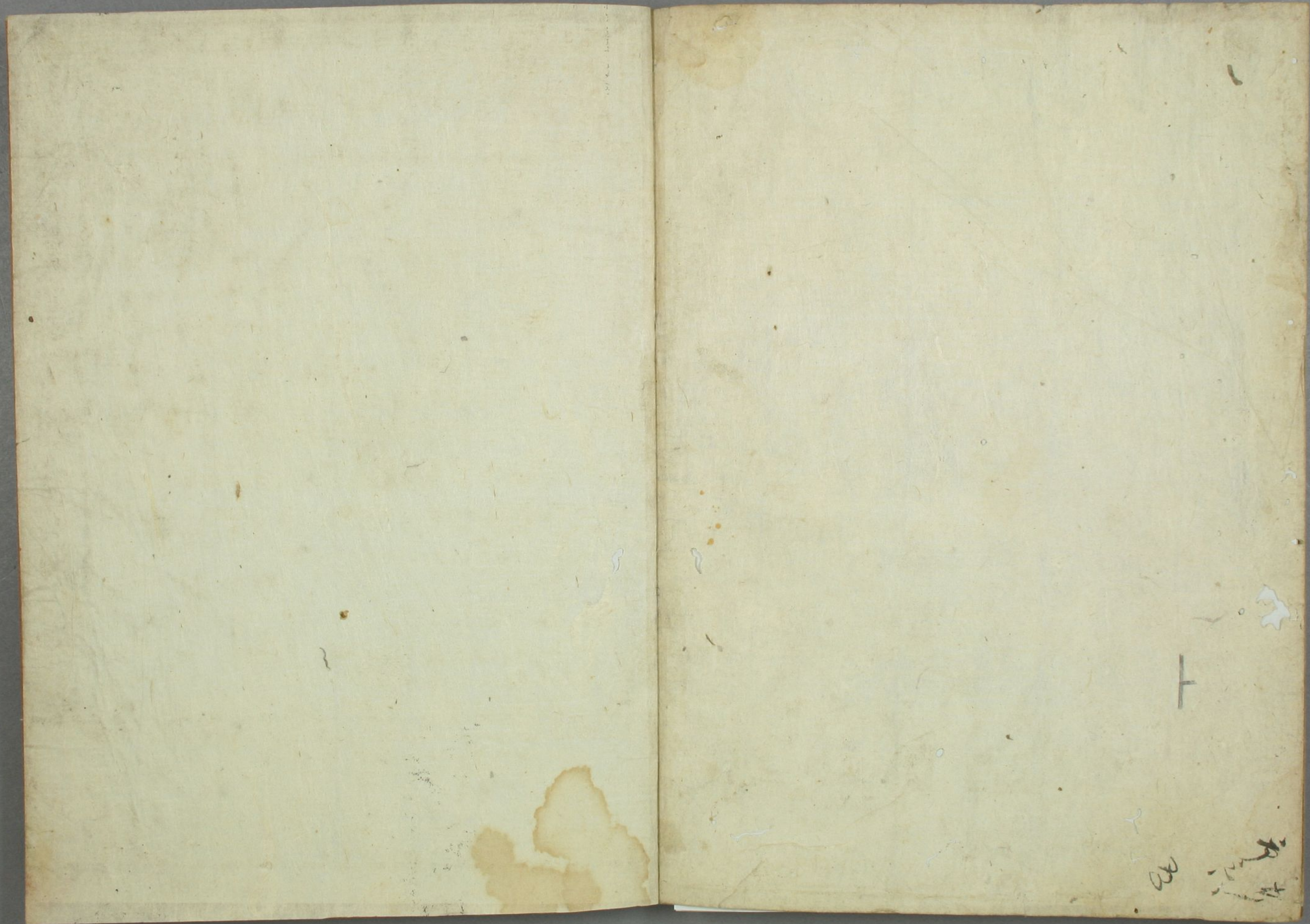
何らこけし時よこころん 巻のうら

こゝろまよひの白き出乃露の久 世の今も

流のこも流て又のまもて 梅の物也

月ももさういふ人太あらん人月と

まらてぬら



T

23

Handwritten marks or characters, possibly in a non-Latin script, located in the bottom right corner of the right page.

